

13 野鼠駆除の現状と確実な再生林に向けた今後の取組

東信森林管理署 一般職員 ○舟木 武
一般職員 加東 良彬

1. 課題を取り上げた背景

日本の人工林の半数は主伐期である 50 年生を超え、本格的な利用期を迎えています。資源の循環利用の観点から主伐後の再生林が重要ですが、その障害となるのが野生鳥獣による被害です。その一つである野鼠被害は全国で毎年 500~800ha 発生しており、東信森林管理署管内でも主要な造林地の一つである大門山国有林を中心に苗木の食害を受けています。再生林を確実に行う上で野鼠対策は必要不可欠であり、当署では殺鼠剤散布による対策を実施しています。本発表は当署における野鼠駆除の現状と今後の取組について報告し、再生林技術発展の一助としていくものです。

2. 平成 28 年度から令和元年度までの取組の経過と結果

殺鼠剤散布による野鼠駆除は平成 29 年の秋から実施しており、春と秋の年 2 回、人力により 5m 間隔で格子状に散布しています。散布面積は増加傾向で、令和元年度の総散布面積は 258.97ha、散布に 80 人工も要しており、当署の業務の大きな負担となっています。



殺鼠剤散布の様子

なお、野鼠被害が発生し始めた平成 28 年度から、野鼠の生息数と種類を把握するために予察調査を実施しています。予察調査とは、0.5ha の標準地内にトラップを 100 個設置し、被害の原因となるハタネズミの捕殺数を 3 日間調べるもので、捕殺数が 20 匹/ha 以上の場合に殺鼠剤散布の必要

があります。調査は大門山国有林と、同時期に野鼠被害のあった大曲国有林、立科国有林で行いました。結果は表のとおり、多くの林小班では殺鼠剤散布後には捕殺数が減少しましたが、大門山国有林の一部の林小班では捕殺数が減少しなかったため、殺鼠剤の効果を改めて検証するために試験を実施しました。

表 予察調査の結果

林小班名	調査年度	調査月	捕殺数 (匹/ha)
大曲106ほ	H29	10月	20
	H30	4月	2
立科109と	H30	11月	34
	R1	7月	0
大門山1117わ	H29	8月	76
	H30	4月	10
	R1	7月	0
大門山1117よ	H28	6月	42
	R1	7月	40

3. 殺鼠剤散布の検証試験と結果

令和元年 11 月 12 日~14 日に、試験の条件を極力揃えるため大門山国有林の同一林小班において、殺鼠剤を散布した試験区 A と散布しない試験区 B を設定し、各試験区のハタネズミの捕殺数を比較しました。

その結果、ハタネズミの捕殺数は試験区 A で 4 匹/ha、試験区 B で 30 匹/ha となり、一つの試験地の結果ではあるものの殺鼠剤散布は野鼠駆除に有効であることが改めて確認できました。

4. 今後の方針

殺鼠剤散布には効果があることが確認できたものの、人力散布は過大な負担を職員に課しており、今後は省力化が必須です。その最も有力な方法としてドローンによる殺鼠剤散布が考えられることから、現在薬剤メーカー、ドローン会社と連携し、令和 2 年度からの実用化に向けて散布試験を実施していく予定です。このような取組を通じて、確実な再生林の推進に貢献していくこととしています。